

『伊勢物語』 二二三段論

——古注釈と近代注釈の比較から——

一 はじめに

『伊勢物語』は、在原業平とされる男の一代記風の歌物語として大変有名な作品である。その『伊勢物語』の中でも、古典の教科書にもよく取りあげられている二二三段筒井筒のところは特に有名で、現在私たちが理解している解釈には、大きな違いは見受けられない。しかし、二二三段の解釈は近代注釈において一般的となったものではない。古注釈では、必ずしもこのような解釈はされていない¹⁾。そもそも「むかし男」を「在原業平」であると断定しているか否か、という大きな違いがある。近代注釈はどれも業平であるとは述べていない。一方で『首聞抄』、『惟清抄』、『闕疑抄』ははっきりと業平であるとして解釈を行っている。つまり、それぞれの注釈書によって、取り上げる問題点も大きく異なっており、「むかし男」に対する解釈のされ方も時代によって違つたために、様々な違いも生まれているのである。

そして、このような古注釈と近代注釈の解釈の違いがあるということ、二十三段が本来作者の伝えようとした内容、あるいは作成初期に伝えられていた内容と、現在私たちが理解している内容とは

白 鳥 藍

違う可能性があると考えられる。本稿では、そうした違いの中でも、冒頭の贈答歌、「もろともにいふかひなくてあらむやは」の解釈、高安の女の歌とその役割の三点に絞つて古注釈と近代注釈の双方を見て、違いを比較・考察していく。そして、二二三段がどのような段であるのかを考えていきたい。

二 冒頭の贈答歌

この場面は、幼い頃から互いを思い合つてきた男女が、念願かたつて遂に結ばれる時に、相手への気持ちを伝える大変重要なところであり、注釈と現代注釈のそれぞれの観点から考察していく。

筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに
女、返し、
くらべこしふりわけ髪も肩過ぎぬ君ならずしてたれかあぐべき

まず「筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに」では「井筒にかけし」の「かけし」の解釈の違いに注目した

い。近代注釈では「比べた」・「目標にしていた」・「誓っていた」の三つの解釈がされている。【新編全集】・【全集】・【新大系】・【全釈】・【評解】は「井筒の高さと自分の背の高さを比べた」の意で解している。(傍線部は筆者による(以下同))【集成】は「自分の背が井筒の高さを超えたら結婚しよう、と目標にしていた」の意であり、【全評釈】では「自分の背が井筒の高さを超えたら結婚しよう、と誓っていた」とする。「かけし」は力行下二段動詞「かく」に過去の助動詞「き」の連体形であり、「かく」に多くの意味があるために意見が分かれるのだろう。ただ、どの解釈も辞書の意味に則ったものであり、意識しすぎているという感もない。ここで、古注釈を見ると近代注釈では意見が三つに分かれていたのに対して、【知頭集】が「かけしとは、くらべしなり」、【臆断】が「その井つ、にかけてくらへしわかたけといふなり」、【古意】が、「かけしは、彼を是と物二つをはかりくらふる語也」と述べて、いずれも「比べる」の意で解している。【新釈】は「『かけし』といふ詞は、こ、よりかしこにおよぶやうの事にいへり」と述べており、「比べる」とは使っていないものの、後で「わらはの時わがたけをいふにつけて、あれほどあらんと井筒にいひおよびしを、かけしといふ也」と述べていることから、「くらべる」、「めがける」といった意味で解釈していると考える。そして、その他の【知頭集】から【臆断】の間の注釈書は言及すらしていないのである。このように注釈では、「かく」の意味での解釈の違いは特にないが、現代の注釈書では細かく分析されている。また、【新釈】が「比べる」という語を使わずに「めがける」といった意味を含んだ解釈をしていることから、江戸時代後期あたりには「かく」に多くの意味が含まれ始めていた、とも

考えられる。近代注釈では様々な意味で解されていたが、今回参照した注釈のうち、「かく」に言及していたものはいずれも「比べる」の意味でとっていた。はじめの【知頭集】が「比べる」の意味で解してから【臆断】まで何も言及されていない、ということは「かく」が説明する程多くの意味を持ち、意見の分かれる語ではなかった、と考える。また、【臆断】・【新釈】においても変わらずに「比べる」の意味でとっていることから「かく」はそのまま「比べる」と解すべきだと考える。この歌全体の解釈としては、【新大系】では「求婚の歌とする」、【集成】では「求愛の歌」などの意見があるように、幼い頃から仲も良く、「この女をこそ得め」と思い続けた男の待ちに待った全力で詠んだ求愛の歌と言える。また、「妹みざるまに」という結句が、大人になって「はぢかはして」いたために会えなかった、それまでもどかしさを表現していると感じられる。この二三段では、男の歌はこの一つだけであるが、この歌から話が始まっていくわけであり、大変重要な愛の歌である。

続いて、女の返し「くらべこしふりわけ髪も肩過ぎぬ君ならずしてたれかあぐべき」の歌である。この歌の「あぐべき」の解釈の違いに注目する。【評解】は、「髪上げといって、婚約の成立した男または夫がすることから、結婚するの意とした。あなたでなくて誰が私の髪上げをするでしょう」としている。一方で、【大系】・【全釈】は「髪上げを(夫と思ひ定めた)あなたのため以外に誰のためにしましょうか。髪上げは夫ではなく、髪上げの親がある」としており、誰が女の(妻となる人物の)髪上げを行うのか、という点で揺れている。また、【新編全集】・【全集】・【新大系】は誰が行うのか、という点は言及せずに「垂らした髪をゆいあげることで成人すること

の意。婚期を示す。あなたのためでなくて、誰のために髪上げをしましょうか」とだけ述べている。【至評釈】は、「一体誰があなたと親しく比べあったこの髪を挙げてよいものですか。私をおんなにして下さるのも、ただあなただけ」といった訳をつけており、やや意識のしすぎのようにも思われる。いずれにしても、解釈上で問題となっていないのは、髪上げを誰のために行うのか、誰が女（妻となる人物の）の髪上げを行うのか、というところである。「あぐべき」については古注釈でも解釈が分かれる。【知頭集】では、白居易の「楽府」の記述を指摘して「これは大國の事なり」、「大くくの人のならひととして、かならずかくするなり」という髪上げの儀式についてのみ述べる。次に【愚見抄】では「あくへきとはおとなになりて髪をあくる事也。かんさしにてかみあげする事をいふ。君ならずしてたれかあくへきといふは、こと人のつまにはなるましき心也」と述べて、【知頭集】にあったような大國の習わしなどは一切述べられずに、この男の妻になろう、という女の強い決意の表れである、ということだけ述べている。【肖聞抄】も、「かみをあくといふは、女おとなになればかならずする事なる。心はた、君か手をふれんと云ふ也。ちきるへきの儀也」として、女が結婚する気であることを表す、と解している。【惟清抄】は「女ハ其年来レハ笄（かんざし）スル也」とだけ述べているが、【闕疑抄】は「かみあけなど、いふ程に、君ならてはたれに手をふれさせんと、女のいふ也。」として、【惟清抄】と同じ説明に加えて、【愚見抄】や【肖聞抄】と同じような「女の強い決意」が感じられる解釈をしている。【古意】も同様の解釈で「髪あげしつべきを、こは君にこそあげさせめ、誰にかはとおもふと也」と述べる。ただ、【古意】と同時代とされる【臆断】

は「女はとしのよきほとになりぬれば、かみあげといふことを」と説明しているだけである。また、【新釈】は、「塗籠本」を底本としているため「くらべこしふり分け髪もかた過ぎぬ君ならずしてたれかなづべき」となっており、「あぐべき」という本とその解釈を否定している。しかし、今回の論では、底本を「天福本」とする『新編全集』としているため、「あぐべき」で解釈を行うこととする。なお、【新釈】では、「あぐべき」を否定する理由としてかみあげは「男すとしてなすわざにはあらず」と述べるが、ここでは髪上げをする、つまり成人になったのであなたと結婚する準備も出来ている、という気持ちを表す意で考えれば「あぐべき」でも意味が通るのではないかと考える。「あぐべき」については、近代注釈では髪上げを誰のために行うのか、誰が女（妻となる人物の）の髪上げを行うのか、などが言及されていたが、古注釈ではそうした点は一切言われていない。そうではなく「あぐ」という行為の意味・内容や、歌の結句として女がどのような気持ちなのか、歌全体の意味することにポイントが置かれており、同じ注釈書でも、そもそも歌のポイントとしている点が違うのである。あるいは、古注釈が書かれた時代においては、「髪上げ」というものが当たり前すぎて「誰が」「誰のために」などの違いに言及することなどあり得なかったと考えられる。そう考えると、注釈書にも時代背景が大きく関わっていると考える。「あぐべき」は「髪上げ」のことで成人することを表しているが、ここで誰がその女の髪を上げるなどということを考えるよりも、やはり「たれかあぐべき」という反語表現による、「私もあなたと結婚したい」という女の強い決意の表れについて捉えていくべきだと考える。そして、ここでは、一緒に遊んだ幼い頃にしてい

た「ふりわけ髪」も、もう肩を過ぎて「あぐ」ことになるほど長くなりました、という少女から大人の女性への成長を強調するために「ふりわけ髪」を詠みこんでいると考えられる。この結句には「親のあはずれどもきかで」、「この男を」と思い続けて自分の意志を貫いた女の気持ちをはっきりと出ている。

以上のように、二十三段の始めの贈答歌における解釈の違いからは、『伊勢物語』という同じ歌物語でも、その解釈は時代によってかなり違いがあることがはっきりとうかがえた。そして、注釈書を検討した上で、この歌が二十三段全体で果たしている役割・効果は何か、と考えた時に、この先展開していく二人の恋模様への入り口、想像力を掻きたてるものとして、大変重要な役割を担っていると強く実感した。二人がどれほどお互いを思いやって結婚に至ったかを示す大事なところであり、それほど思い合っていたはずなのに、この後「もろともにいふかひなくてあらむやは」として男は別の女を作る、という波乱万丈な展開には欠かせない愛の贈答歌である。

三 「もろともにいふかひなくてあらむやは」について

男女は先の贈答歌を経て、念願かなってめでたく結婚するのであるが、女の親が「なく」なり、「頼りなくなる」と「もろともにいふかひなくてあらむやは」ということを理由にして、男は新しく高安の女を作って通うのである。

さて年ごろふる、ほどに、女、親なく、頼りなくなるままに、もろともにいふかひなくてあらむやはとて、河内の国、高安の郡に、行き通う所いできにけり。

ここで問題となるのは、各注釈書によって、男が貧しくなった女を見捨てて別の女に通うことにしたのか、それとも、お互いのためを思っ、互いがしかるべき道をいけるように別の女に通うことにしたのか、という解釈の揺れである。「もろともにいふかひなくてあらむやは」という考えに至ったのは、そもそも女の親が「なく」なったために「頼りなくな」ったことが原因とされるため、「頼りなし」、そして「もろとも」に「いふかひなし」「あらむ」の「む」「やは」に分けて考察をし、逐語訳をすると、「このまま一緒に、経済的にどうしようもない（ふがいない）生活をするのであろうか、いや、しない」となる。つまり、

① 「男が」この女とこのまま一緒に、経済的にどうしようもない生活をするのであろうか、いや、したくはない」（と思った）
② 「男が」二人でこのまま一緒に、経済的にどうしようもない生活をするのだろうか、いや、お互いの為にも良くない」（思った）

という二つの解釈での揺れが近代注釈・古注釈の両方でおきている。『新編全集』が「男はこの妻と共に貧しいあわれなさまでいてよいものかと思つて」としているように、【全集】・【新大系】・【大系】・【全釈】・【評解】は男が元の女と相談して決めたのではなく、自身の貧しい生活を変えることだけを考へて行ったことだと解釈している。一方で【集成】は「男は二人ともがみじめな暮らしに落ちてよいものか、と思つて」、【全評釈】もこれをお互いのために男が考えたこと、或いは夫婦二人で考えたことであり、男だけではなく互いの貧しい生活を変えるために行ったことだとしている。この解釈をすると、貧しくなった女を捨てる身勝手な男とは正反対で、

女をとて大事に思ったがゆえに自分が身を引いた、思いやりのある男として描かれていることになり、読者のこの男への評価は大きく変わってくる。

では、古注釈はどう解釈しているのであろうか。まず、【知頭集】にはこの部分について現代注釈のような記述はない。また、【愚見抄】にも記述はないが、「此をんな、をやにはなれて、たづきなくなりにけり。此男、又たかやすに人をもちて、行きかよふことあり。」とだけ書かれており「たづきなくなり」、つまり頼りとするものがなくなつたために、男が高安の女を持つようになった、という説明はされている。そして、いわゆる旧注と分類される注釈書になつて、【首聞抄】が「をのをいいかやうにもしかるへき方に成なんなと云心なるへし」と述べる。【惟清抄】・【闕疑抄】も、男が自分と女の二人の今後のためを考えて、あるいは、自分よりも女のたれを思つて、別の女に通つた、として解釈している。さらに、この三つはどれも『大和物語』一四八段の歌を取りあげて、お互いのために男が別の女に通うことにした、としている。『大和物語』一四八段は、それほど身分も賤しくない男女が生活に困つたために、夫婦で話し合つて別々の暮らしをするのだが、この一四八段を例に出している点からは、高野奈未氏も述べるように、【首聞抄】・【惟清抄】・【闕疑抄】らの旧注が、「夫婦の話し合ひの結果」として男が別の女の元へ通うことになつた、と考えたことを意味しており、それはこの男が自分勝手な男ではないことを証明することにも繋がっている。また、重要な点は、【首聞抄】・【惟清抄】・【闕疑抄】のいずれも「男は業平也。女は有常か女とかけり」というように人物を特定した上で、業平の心が浅いのではなく、女を憐憫した心である、

として業平像に性格を与えているのである。【闕疑抄】では、零落したから男が別の女の元へ通う、と解釈しては「あしき段になる」とまで注意して業平の「憐憫の心」ゆえの思いやりのある決断だ、と主張している。そして、その後の新注とされる注釈では、さらに変化がみられる。旧注とは違い、男が貧しくなつた女を捨てて、新しい女を作つた、という解釈になる。

・男も女もかやうにたづきなくてあらんや。おのおのしかるへき方につきなんと、男のかたよりいひ出て、高安郡のある富家のむすめにかよふなり。(中略)此古今の注此男のまことの心なり。もろともにいふかひなくてあらんやはと男の心におもひていふにや、ことばをつくりてつきつきしくいひなしてすなり、いつれにても業平の心にはあらず【臆断】

・女の父母のなく成て、まづしくなりぬれば、かくてのみあらんはたが為も人わろきぞとて、男は高やすの女にもすまんとてかよふなるべし、【古意】

これらの考えで男を評価すると、ただ本当は貧しくなつたのが嫌で別の女のもとへ通うことにしたのに、お互いのためだから、と言つて女をうまく誤魔化したひどい男である。そんなひどい男であるとはつきり説明しているからなのか、【臆断】は何度も「業平のことにはあらず」と繰り返し、理由までつけて業平ではないことを主張している。【臆断】がはつきりと業平でないことを主張するのは、旧注とは大きな違いである。また、『大和物語』を引用して説明を

加える際に、高野氏も指摘しているように、旧注のような一四八段ではなく、【臆断】や【古意】は一四九段を使っているのも特徴である。さらに、【臆断】や【古意】のあとに書かれたとされる【新釈】でも、お互いのために男が別の女のもとに通うことにした、という旧注の解釈は「いみじきひがごと也」として一蹴している。また、旧注や新注とは異なり、『天和物語』との関係性については一切触れず、客観的に物語として道理が合う展開を考えようとしている。【新釈】はそれまでの研究を踏まえた上で、全く新たな独自の解釈を打ち出していると考えられる。

以上のように、「もろともいふかひなくてあらむやは」の部分は、何も言及されていない【知顕集】に始まり、男がお互いの為を思つて別の女に通うことにしたとする、思いやりのある業平像を伝えている【肖聞抄】・【惟清抄】・【關疑抄】へと発展した。さらに、男は女が貧しくなったから捨てたのだとする、業平ではないひどい【男】の話として【臆断】や【古意】、【新釈】のように解釈されるようになった。そして、それらを踏まえてどちらの解釈も残る現代注釈に至っている、ということがわかった。では、そうした流れをくんで、「もろともいふかひなくてあらむやは」の部分はどう捉えるべきだろうか。旧注は、あくまでも主人公は男であり、その男は在原業平である、という考えに基づいて解釈している。そして、その業平に対するヒーロー性を重視しているために女を思いやる男として考えられている。一方で新注は、業平のヒーロー性を描くわけではなく、一人のひどい男の話として描いているだけである。しかし、二十三段において主人公は元の妻と高安の女の二人であり、女たちの紆余曲折のそれぞれの境遇を伝えるためには思いやりのあ

る業平像ではなく、貧しさを切り抜ける時に自身の生活の改善のみを考える人間味のある男の存在が必要ではないだろうか。業平にヒーロー性を持たせるのは、あくまでも旧注の時代における『伊勢物語』の読み方であり、【知顕集】にその読み方が出来ない以上は、「思いやりのある業平」として読むべきではない。よつて本稿では、お互いを思つて両者が相談した上での行動ではなく、男だけが「もろともいふかひなくてあらむやは」と考えたものであるとする。

四 高安の女について

高安の女は次の場面では男が「心憂が」つたために捨てられる。

まれまれかの高安に来てみれば、はじめこそ心にくもつくりけれ、いまはうちとけて、手づから飯匙とりて、笥子のうつほものにもりけるを見て、心憂がりて、いかずなりにけり。

しかし、捨てられてもお二首も歌を詠むのであり、この歌に注目して考察していく。一首目は「君があたり見つつを居らむ生駒山雲なかくしそ雨はふるとも」であり、『万葉集』巻十二の三〇三二番歌が類歌とされている。この歌について近代注釈では解釈に違いはない。いずれも『万葉集』に類歌があるという点に触れ、男のいるであろう辺りを見続け、雨は降ったとしても、生駒山を隠さないでほしい、と雲に頼んでいる歌、という解釈である。また、注釈でも【古意】が「心はいと切にしなし」と女の心情を詠んだ以外は、『万葉集』からの歌であり、その意味はすでに明らかであるとして女の心情まで言及されていない。類歌とされるのは「君があたり見つつ

も居らむ生駒山雲なたなびき雨は降るとも」⁽⁵⁾であるが、今回参照した『万葉集』の注釈書からは、この歌は男を心配する、女の切ない心情を吐露している歌だという解釈がされていることがわかった。⁽⁶⁾したがって、雲に対して無理に思える願いをしましうほど、男が来ないことを嘆き、悲しんでいる女の歌であり、高安の女はこれを類歌とする歌を詠んだのであり、非常に場面に合った歌を詠んだと言える。また、契沖や武田祐吉氏の意見によれば、歌を詠んだこの女は都にいる女であって、あなかの女が詠んだ単純な歌、というものでもない。しかし、『伊勢物語』の注釈においては前述したように、高安の女の心情についてはほとんど述べられることもなく、場面に合った歌を詠んでいる、といった評価もなかった。同じ内容の歌であつても、『伊勢物語』でのこの歌は、元の女の歌と対比され、男が「心憂が」って行かなくなるような態度、心理の持ち主が詠んだものとしての扱いを受ける。つまり、高安の女という「捨てられた女」、「浅はかな女」が詠んだ歌であつて、その心情は解釈の必要もない、という考えのもとに注釈がされているのである。

次に二首目は、「君こむといひし夜ごと過ぎぬれば頼まぬもの恋つつぞ経る」という歌で、類歌とされるものはない。一首目と異なり、『全集』・『新編全集』では「なおも男を恋慕う心を詠む」と述べ、『新大系』では「棄てられた愛人の嘆き」だとして「結末としては捨てられることになる河内の国の女も哀切な訴嘆によって読者の共感を触発することになる」とこの女への同情の気持ちによって述べられている。また、古注釈でも『闕疑抄』は「君こむと度々過し侍れば、たのますは有なから、又さすかに待て恋つ、ぬると也」、「臆断」は「たのまぬもの、といへるのもおもしろし」、「古意」は

「來んと聞こえつるに、こぬ夜の多く過ぎぬれば、今はさるおとづれのあれど、思ひたのまれぬものから猶も戀したひつ、月日の経ゆくと也」、「新釈」は「たのみにならじと思ひながらも、心にかゝりてこひつ、ぞをるといふ意なり」として、歌の注釈をつけ、女がどのような気持ちで詠んだ歌なのかを述べている。一首目は、元の女が夫を心配する歌を詠むのに対し、男が来なくてもせめて姿は見たいという寂しく切ない自身の気持ちを詠った。そのため、男への思いやりの気持ちとしては元の女よりも劣るために、近代注釈と古注釈のいずれでも歌の評価をされることもなく、心情を解されることもなかった。しかし、二首目については高安の女が男を恋しく思いながら月日が経つてしまふ、悲しい状況を詠んだものであることに言及している。これは、確かに高安の女は「捨てられた女」、「浅はかな女」という「悪い女」ではあるが、二首目を一人の女性の歌として捉えた時には『新大系』が述べるように「共感」や「同情」の気持ちを読者に抱かせ、哀れだと思わせるからであろう。つまり、一首目の段階では元の女と対比されるただの「悪い女」であつた高安の女は、二首目の段階では「哀れな女」として読者にその立場や思いを共感、同情される女へと変わるものである。そして、こうした高安の女自身の評価や、歌の捉え方においては、近代注釈と古注釈の相違はないと言える。

さて、この高安の女の歌は二首とも「読み人知らず」、「題知らず」として『新古今和歌集』（以下『新古今集』とする）に入集している。⁽⁸⁾その注釈を見るとどちらも、『新古今集』に入ったとしてもそれは『伊勢物語』の高安の女が詠んだ歌、として解釈されているが、『伊勢物語』とは違い、『新古今集』ではどのような心情で詠まれた

ものであるのか、が説明されている。⁹⁾つまり、『新古今集』においては、高安の女は男に捨てられる女ではあるが、後世の読者には哀れな女として大きな存在感を残していると言える。この女の二首は両方とも『新古今集』に入っているが、元の女や男が詠んだ歌は後世の歌集には入っていない。さらに、『新古今集』では一首目は恋五として恋の終わり、二首目は恋三として恋の中ごろ、とされて入集している。つまり、『伊勢物語』では「君来む」との歌はもう男は来ないことが明らかであって、恋の終わりを切なげに示しているとしたか思えないが、『新古今集』では恋の中ごろの歌として、この哀れな高安の女にまだ男が来るかもしれない可能性を与えているのである。これらの点でも、高安の女は『伊勢物語』においてはたとえ男に捨てられた悪い方の女であっても、読者には忘れがたい存在感を示し、印象深い女であるといえる。ただ、元の女を称揚するための「悪い女」として存在しているのであり、だからこそ最終的には男は高安の女には「心憂がりて」行かなくなるのである。

では、「悪い女」として存在するこの女はなぜ元の女と同じく、二首も詠んでいるのであろうか。それは、『伊勢物語』二十三段において主人公はこの女たちであり、悪い方の女であってもその女の気持ちを出すことに意識が置かれていたからであると考ええる。高安の女は「捨てられた女」「浅はかな女」ではあるが、そうした捨てられた女の気持ちも表し、それがあからこそ元の妻の幸せもより一層感じることが出来る。二人の女の差を描くためには、むしろ二首も歌を詠んで、男を切実に待つ姿を描く必要があったのである。この時に男はもう一首も詠まず、第三者のように語られるだけであり、その点から主人公は女たちであるとと言える。ここで本当に

『伊勢物語』の二十三段が男を主人公に描きかけたのであるとすれば、女に歌はもう詠ませないはずである。可哀想だと思えてしまい、ひたすらに待つ女を描き、二首も詠ませるのは、確かに「悪い女」ではあるが、この女も主人公の一人だからである。さらに、高安の女は嫌われるとは思っていないかった行動によって男に嫌がられてしまうのであり、そこには男と女の価値観の違いが表れている。高安の女が哀れな女として二首も歌を詠むことで、男女の価値観の違いとそれによってもたらされることを暗に示している、とも考えられる。

五 おわりに

以上、古注釈と近代注釈の違いを中心に『伊勢物語』二十三段の問題点を提示してきた。二十三段にはその他にも解釈の揺れが生じている点が多くある。しかし、本論で考察してきた点だけでも注釈と現代注釈の相違があり、この話を享受していき際に、いかにそれぞれの時代の価値観が反映されてきたか、がはっきりとうかがえる。【新釈】はこの段のまとめとして、「すべて此の物語は男も女もころばへのははれにすぐれて、いやしきふるまひなさをよしとしてかきたるもの」と述べる。しかし、この二十三段は本当にそうした男女の心の浅さや深さについて描いているだけの作品なのであろうか。そうであるならば、高安の女にわざわざ歌を二首も詠ませる必要はないであろう。自身の貧しさのために別の女のもとへ男を送りだすこと、男へ歌を詠むものの、嘘をつかれ寂しく待つこと、そうした女たちの行動を描くのは、単に人間として生きていくためにどのような心を持つべきか、という行動の指針を示すためだけに

はない。読者はこの女たちに共感や同情をおぼえ、感情を揺さぶられるのである。二十三段は、心の良し悪しよりも、「良い女」と「悪い女」の両方を主人公として描き、女性がいかに男性に左右されるものであるのか、両者の歌でその女たちの在り方、生き方を読者に強く訴えかける作品である。

※『伊勢物語』本文引用は、新編日本古典文学全集『伊勢物語』（小学館）に拠る。

注(1) 本稿では注釈書の内、次に掲げるものを使用し、便宜的に明治以降に書かれたものを「近代注釈」、その前に書かれたものを「古注釈」として区別する。略記は左記を用いる。

*古注釈

- | | |
|-----------------------------|-------|
| 『伊勢物語知蹟集 島原松平文庫本系統』（鉄心斎文庫蔵） | 【知蹟集】 |
| 『伊勢物語愚見抄』（冷泉家時雨亭文庫蔵） | 【愚見抄】 |
| 『伊勢物語肖聞抄 延徳三年本』（聖護院蔵） | 【肖聞抄】 |
| 『伊勢物語惟清抄』（天理大学付属天理図書館） | 【惟清抄】 |
| 『伊勢物語闕疑抄 寛永十九年刊本』（鉄心斎文庫蔵） | 【闕疑抄】 |
| 『勢語臆斷』 | 【臆斷】 |
| 『伊勢物語古意 流布本版』（宮内庁書陵部） | 【古意】 |
| 『伊勢物語新釋』 | 【新釈】 |

*近代注釈

- | | |
|----------------|------|
| 日本古典文学大系『伊勢物語』 | 【大系】 |
| 『伊勢物語評解』 | 【評解】 |
| 日本古典文学全集『伊勢物語』 | 【全集】 |

新編日本古典集成『伊勢物語』

『伊勢物語全集』

『伊勢物語 全評釈』

新編日本古典文学全集『伊勢物語』

新編日本古典文学大系『伊勢物語』

(2) 大津有一著『伊勢物語古注釈の研究』（八木書店・昭和六十一年）によれば、現在伝わっている『伊勢物語』の注釈書としては、『伊勢物語髓脳』が最も古いとされる。その後多くの古注釈が書かれ、一般的に鎌倉時代以前に書かれたものを「古注」、室町時代以降を「旧注」、江戸時代以降を「新注」とする。

(3) 高野奈未「近世における伊勢物語二三段の読解―旧注から『伊勢物語古意へ―』」『國語と國文学』八五巻九号、平成二二年九月

(4) 注(3)に同じ

(5) 小島憲之・東野治之・木下正俊校注、訳『新編日本古典文学全集6』

8 萬葉集①③ 小学館、平成六年

(6) 『賀茂真淵全集第二巻』群書類従完成会、昭和五二年、武田祐吉著『改訂萬葉集全註釋』改造社、昭和三年、澤瀉久孝著『萬葉集注釋卷第十二』中央公論社、昭和三八年、土屋文明著『萬葉集私注六』筑摩書房、昭和五二年

(7) 『契沖全集第五巻』岩波書店、昭和五十年、武田祐吉著『改訂萬葉集全註釋』改造社、昭和三一年

(8) 峰村文人校注『新編日本古典文学全集43新古今和歌集』小学館、平成七年

(9) 『新古今集古注集成近世旧注編2 加藤磐斎「新古今増抄」』（寛文三年板本）笠間書院、平成十一年、北村季吟著『八代集抄』六合館、明治三五年